房総の山のフィールド・ミュージアム　ニュースレター

しいむじな

発　行
千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先
〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL：043-265-3111
http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/

2016（平成28）年６月発行

2016・夏
53

稲にも顔がある

これは二〇〇九年七月二十九日、君津市市宿の田んぼの写真です。

稲が縞模様になっているのがおわかりいただけますか？

昭和三十年代まで千葉県内で育てられていた稲の品種を何種類か育てた時のものです。

縞模様は、稲の種類の違いです。一言で稲といっても、見た目はこんなに違います。

見た目だけでなく、稔る時期、実のこぼれ方も様々です。

農業が機械化される以前は、こんな様々な顔をした稲が、あちらこちらの田んぼで育てられていました。

（島立　理子）

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

清和県民の森を中心とした房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる千葉県立中央博物館が中心となっておこなっている新しい博物館活動です。観察会の開催、君津市立三島小学校での「教室博物館」開設に加え、地域の人々と協働で資料の収集や調査・研究等をおこなっています。

特集

苗代からはじめる田んぼの体験

めざせ田んぼのマイスター

「めざせ!! 田んぼのマイスター☆」は他の「米作り体験」とは違います。

どこが違うかというと、「苗代作り」からはじめるのです。苗代とは、田んぼに植える稲の苗を育てる場所の事。田んぼの隅っこの水の入口の近くに作ります。

多くの「米作り」体験は「田植え」がスタートです。田植えでは苗を植えます、種子は蒔きません。だれかが育ててくれた苗を植えているわけです。

その苗から育てるのが「めざせ!! 田んぼのマイスター☆」の特徴の一つです。

近年では、農家の方も、田植えに使う苗は農協などから購入するか、育苗器で育てることがほとんどです。

伝統的な農業技術の継承を目的とした「おばあちゃんの畑」プロジェクトの一環として実施しているこのワークショップでは、苗代作りも継承すべき大切な技術の一つと考えています。

（島立　理子）

今年は4月17日に苗代作りを行いました。

1

ロープで囲われたところに土を盛ります。

2

手で田んぼの土を盛り上げます。

3

盛り上げた土を板でたたいてならしていきます。
この作業が大切です。

4

苗代ができあがりました。このまま数日間おきます。
すぐの種子を蒔いてはいけません。待つことも重要。

5

４月29日に種子蒔きをしました。
元気な苗がそだつことでしょう。

コラム

房総丘陵の動植物（1）

房総の古い森とキノコ

キノコ狩りをしていると、オールドフォレスト、というよびかたをすることがある。来歴の古い森、人為の影響の少ない森には、多様な珍しいキノコが見られる、という時に使われる。絶滅危惧種を選ぶ場合、そんな森に依存している種類は、はやり候補種のひとつとなる。では、なぜ古い森なのか。

一般にキノコは胞子で分散するので、どんなところへでも飛んでいき発生するように思われがちである。しかし実はそうでない。特に植物と栄養共生しているグループは、植物とともに、地続きに分布域をひろげていく。地上部の植物が伐採されてしまうと、地下に広がる菌糸のコロニーも共に消えてしまい、何万年（もしかしたら何十万年）もかけて広げたキノコの生息域は消えてしまうのだ。だから古い森ほど、多様なキノコ相をもっている。

シロオビテングダケ

千葉県だと清澄寺や東大の演習林のあるあたりが、その「古い森」に相当する。そこはシイ・カシの照葉樹が主体の森であり、この森は中国南部をへてヒマラヤ中腹まで広がっており、同時にブナ科と共進化したキノコの種類が沢山みられる場所なのだ。清澄山周辺は、演習林でもあり、比較的保存・保護された場所でもある。だから、ときに、あっと驚くような種類も採れることがある。たとえば、千葉のキノコの当たり年だった二〇〇〇年、演習林の荒樫沢で採集され、二〇〇二年に新種記載されたシロオビテングタケ。最初の場所に1回発生しただけで、その後、日本はおろか世界のどこからも報告がない。テングタケ属なので見分けも容易、ファンも多く、もし変わった種類がみつかれば、誰かから報告がある可能性が高いグループである。国際的にもそうだ。本種のDNAデータも公開されている。しかし、この15年間どこからも報告がない。これはいったい何故なのか。

おそらくシロオビテングタケは、他のテングタケ類と同様に、東アジアのシイ・カシ林と共進化した東アジアの固有種で、古くは、この地域に広く分布していたのだと思われる。しかし開発などの人為的な理由で生息域は狭まり、房総半島の一部に生き残ったものだろう（と、私は考える）。つまり本種は、房総半島のキノコ相の来歴を教えてくれると同時に、房総半島が、貴重な生物相が残る、アジアの中でも珍しい場所であることを物語る種類なのだ。

同じような貴重な種類は、房総の「古い森」で将来もっと見つかるにちがいない。生物を調べる場合、調査対象地の「古い森」は重要である。平凡な自然しかない、と言われがちな房総の自然も、なかなかあなどれないのである。

（吹春　俊光）

連載

小櫃川流域の生きもの

トウネン ～最小のシギ～

「ああいいな」と五月の夕暮れ、木更津市の盤洲の海岸で腰を下ろして海を眺めていました。

そのうち潮が引き、砂地が現われてきました。それを待っていたように、約40羽のメダイチドリの群れが飛来し、浜に下りて、えさを探り始めました。その中に7羽のトウネンが混じっていました。

トウネンはシギの仲間では一番小さく、スズメより少し大きいくらいです。ちなみに小さいことを当年生まれと表現して名付けたそうです。

トウネンは秋にもやってきます。漂着した海藻の上で、波に揺られながら、盛んにトビムシをあさります。秋は淡い茶色です。

初夏のトウネンはお酒を飲んだようにほほがほんのり赤い色をしています。そして、私がいても見向きもしないで、くちばしを砂浜に挿して、短い脚でえさを探しています。まるでヒヨコのようです。また、毎年、ハスが芽生える頃、数羽の群れが海岸近くのはす田でも見られます。

こんなにかわいらしいシギが流域の海岸や平地に訪れるのです。それも極北の地の繁殖地からやってくるのですから、嬉しくなります。

桑原和之外3名著「東京湾の鳥類」（2000たけしま出版）には90年代に盤洲周辺で約100～180羽の群れが訪れているとあります。

近年、私は数羽の群れしか見たことがありません。再び、大群を見たいと願っています。

（文・写真　千葉県立中央博物館ボランティア　成田　篤彦）

❶ 初夏のトウネン　13年5月　盤洲干潟
右端がハマシギ、左上はメダイチドリ
❷ 秋のトウネン　10年9月盤洲干潟

MEMO　トウネン

チドリ目シギ科　全長約13～16センチ。春秋に渡来。千葉県指定一般保護生物。繁殖地はシベリア北部、越冬地は東南アジア、オセアニアの海岸部。

観察会で見つけたこんなもの

自然観察路で見つけた
シャグマアミガサタケ　2016.4.16
Gyromitra esculenta
（フクロシトネタケ科）

４月の山の学校で自然観察路を歩くと必ずといって良いほど見つかるキノコにシャグマアミガサタケがある。写真のように赤褐色をした凹凸のある脳状の頭部を持ち、柄はクリーム色がかった白色をしている。グロテスクな見た目のとおり、食べると死に至る可能性のある猛毒キノコである。

和名のシャグマは漢字では赭熊と書く。赤く染めた、白熊（はぐま：ヤクの白い尾の毛）のことで、仏具の払子（ほっす）やかつらなどに使うものだそうだ。色が似ていることから名付けられたのだろう。

冒頭に猛毒のキノコと書いたが、面白いことにシャグマアミガサタケの種小名の“esculenta”には「食用」という意味がある。事実、フィンランド料理にはこのキノコを使ったレシピがあり、水煮の缶詰が流通しているほど親しまれているという。

じつはシャグマアミガサタケの毒成分は水溶性で、十分煮こぼすことによって毒抜きできるが、煮こぼす際に立ち上る蒸気にも有毒ガスが含まれるため注意が必要。しかし、このキノコ、そんなに手間をかけて食べるほどおいしいキノコなのだろうか？　皆さんは念のため、見つけても絶対に食べないようお願いします。　（小田島　高之）

房総南部の鳥たち

キビタキ

キビタキはスズメより一回り小さい鳥で、千葉県では春に南から渡ってくる「夏鳥」です。まるでピッコロを演奏しているような美しい歌声を披露しながら渡ってきます。特に4月下旬から5月中旬ころには小規模な雑木林や斜面林、社寺林などでもその歌声を聴くことができ、春の訪れを教えてくれます。

美しい歌声につられてじっと探してみると、鮮やかに彩られたその姿を見ることができます。特に目立つのは、木漏れ陽を浴びて輝くのど元の橙色です。ミカンのように鮮やかな橙色は、何度見ても息をのむ美しさです。その橙色は腹部にかけて薄くなり、鮮やかな黄色になります。この色は一見すると目立ちますが、薄暗い雑木林の中では背景に溶け込んでしまい発見が難しくなります。派手に見えてもそこは野鳥、敵に見つからないように計算されつくした美しさをしています。

美しい容姿に美しい歌声、天に二物を与えられたキビタキは常に人気者です。その愛くるしい姿に出会えたら、あなたもキビタキの虜になること間違いなしです。雑木林から笛の音が聞こえたら、目を凝らしてみてください。きっと鮮やかなキビタキが出迎えてくれるでしょう。

（千葉県生物多様性センター嘱託職員　中込　哲）

キビタキ雄

キビタキ幼鳥

編集後記

「しいむじな」はこの五三号から紙面をリニューアルいたしました。

新しい「しいむじな」はいかがでしたか？　今後もみなさんにお楽しみいただける紙面作りを心がけていきたいと思っています。

しいむじなの由来

房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。